

## 論文

# 中国大陸と台湾の空間認知に関する意識調査

——“这・那”の選択から見た距離感の違いについて——

鈴木 進 一

SUZUKI Shinichi

## 1. はじめに

中国大陸（以下では「大陸」と記す）と台湾では、日本語の共通語にあたる言葉として、いわゆる「中国語」を使用している。これを大陸では「普通話」と呼び、台湾では「国語」と呼ぶ。

「普通話」と「国語」では物の呼び方が異なることがあったり、発音の面で違いがあったりすることは、既に周知の事実である。しかし、指示詞については、日々頻繁に使われる日常言語の基本語であって、物の呼び方が地方によって異なるのとは違い、同一の言語を使用している地域ではその使われ方はほぼ同じであると、従来暗黙のうちに了解されてきたように思われる。

しかし、鈴木（2011）では、日本語小説中の指示詞の中国語訳を、大陸と台湾で出版された翻訳を比較することにより、両地域における中国語指示詞“这・那”の使用実態に違いがあることを実証的に示した。それによって、“这・那”の持つ遠近の違いから、大陸と台湾における遠近認知に違いが存在すると主張している。

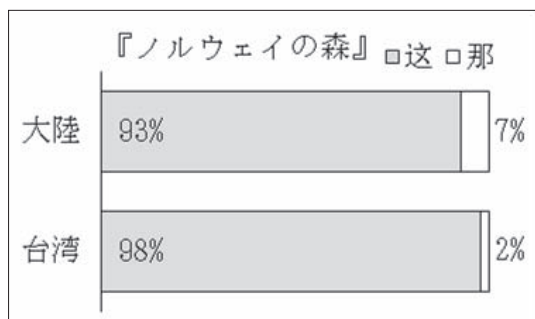
本研究では、小説の翻訳を比較するという文字資料の調査ではなく、アンケートによる意識調査という方法を採用し、大陸と台湾における空間認知の実態を指示詞の面から比較する。果たして大陸と台湾において一般の中国語ネイティブ達も小説の調査結果と同じような指示詞使用の違いを示すのか或いは示さないのか、大陸と台湾との間で違いを示すとしたらそれはどのような違いとなって現れるのだろうか、という点について調査し、鈴木（2011）の結果を検証したいと考える。

## 2. 先行研究における問題点

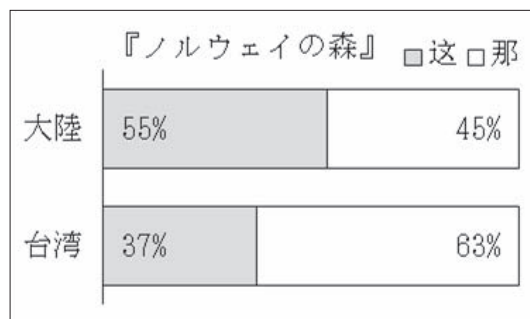
鈴木（2011）では、『ノルウェイの森』の中の日本語指示詞「これ・それ・あれ」の中国語訳を、大陸で出版された林少華の訳と、台湾で出版された頼明珠の訳とで比較している。下のグラフ1, 2, 3は、『ノルウェイの森』の中の日本語指示詞「これ・それ・あれ」を中国語指示詞“这・那”を使って訳したものに限定したとき、“这・那”が使用される割合をグラフで示したものである。グラフ1, 3を見ると、近称の「これ」に対しては大陸版、台湾版ともに“这”を90%以上使い、遠称の「あれ」に対しては大陸版、台湾版ともに“那”を90%以上使っていて、2つの訳でほぼ同じような傾向を示している。ところが中称の指示詞「それ」に対しては、グラフ2のように、大陸版では“这”を55%使っているが、台湾版では37%しか使っておらず、18ポイントの差がある。「それ」

に対しては、2つの翻訳の間で“这”を使って訳すか、“那”を使って訳すかでゆれているのが分かる。

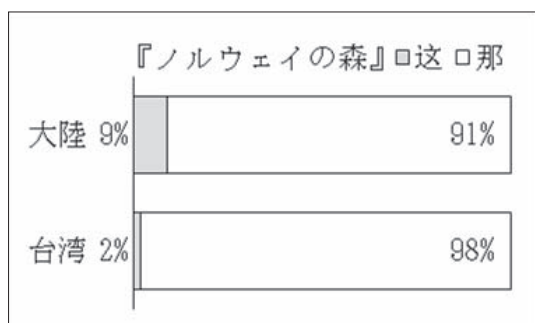
グラフ1 「これ」と“这・那”



グラフ2 「それ」と“这・那”



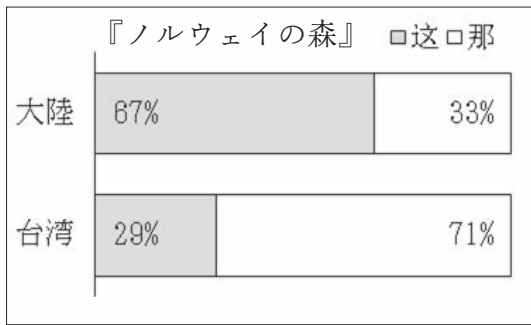
グラフ3 「あれ」と“这・那”



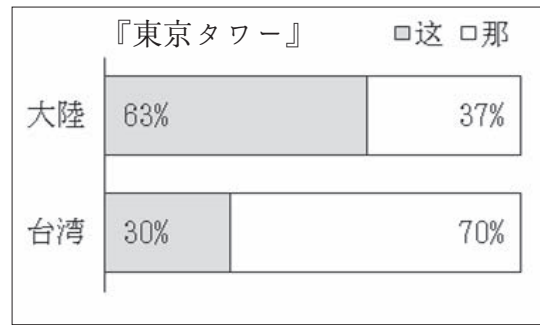
(鈴木 2011 p.163)

鈴木の研究は、指示対象に対して使用する指示詞の遠近から、大陸と台湾の遠近認知の実態を比較しようとするもので、指示詞に指示機能が明確に現れているほど調査の精度は高まる。そこで鈴木(2011)では更に「それ」の中でも指示機能がはっきりと現れている「それが・それは・それを」を取り出して、同様に“这・那”の使用割合を調べている。また、『ノルウェイの森』から得られた結果を検証するために、別の小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』(以下では『東京タワー』と省略する)に対しても、「それが・それは・それを」に対して同様の調査を行っている。それらの調査結果をグラフで表したものが下のグラフ4からグラフ9である。『ノルウェイの森』の「それは」(グラフ5)だけが大陸版も台湾版も、“这”より“那”の割合が多い、しかしそれ以外はすべて、大陸版の方で“这”が“那”より多く、台湾版の方では“那”が“这”より多くなっている。ただ1つの例外である「それは」も見方を変えると、“这”の割合については大陸版の方が台湾版よりも多く、“那”の割合については、台湾版の方が大陸版よりも多い」ということが成り立っている。しかもこれは『ノルウェイの森』と『東京タワー』の6つのグラフすべてについて成り立っている。この意味において、鈴木(2011)では「大陸版では“这”の割合が多く、台湾版では“那”の割合が多い」(鈴木2011 p.173)と結論付けている。しかし、中国語指示詞は“这”と“那”の2系統であることから、“这”の割合は、大陸版の方が台湾版よりも多い」と更に簡単に表すことができる。

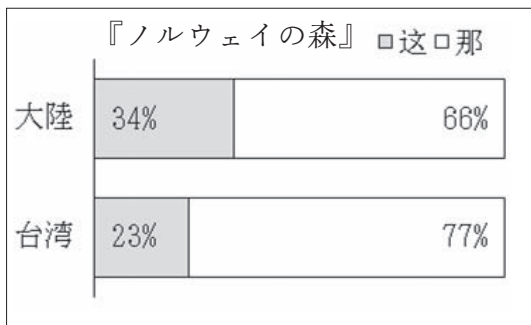
グラフ4 「それが」と“这・那”



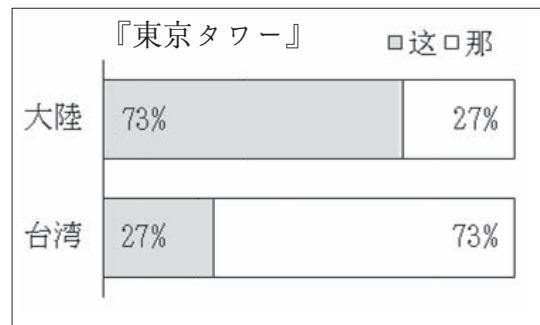
グラフ7 「それが」と“这・那”



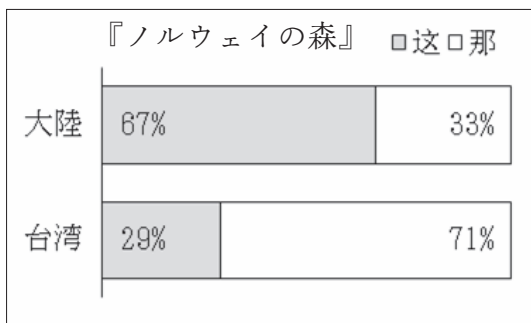
グラフ5 「それは」と“这・那”



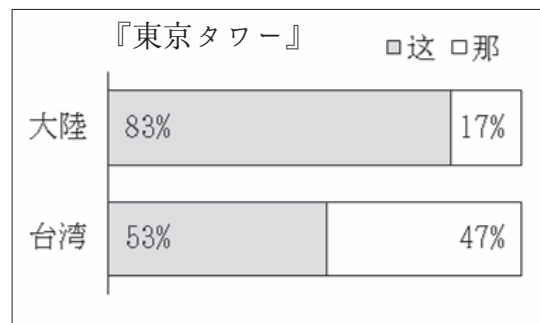
グラフ8 「それは」と“这・那”



グラフ6 「それを」と“这・那”



グラフ9 「それを」と“这・那”



しかし鈴木（2011）に対しては、次の2つの点からより詳しい検証が必要と思われる。

①鈴木（2011）では『ノルウェイの森』を中心に調査し、そこから得られた結果について別の小説『東京タワー』を使って検証している。しかしこれら2作品の翻訳に携わっている翻訳者は、大陸版2人、台湾版2人の合計4人である。もちろんわずか4人とはいえ、多くの読者を意識して翻訳しているはずであるから、読者達とかけ離れた指示詞の使用法はされていないと思われる。しかしそれでも、更に多くの中国語ネイティブも翻訳者と同じように指示詞を使用するのだろうか、という疑問が残る。

②日本語小説の翻訳者達は、高度な日本語に対する知識があり、それが母語である中国語の指示詞の選択に何らかの影響を与えてはいないだろうか。日本語の知識を持たない一般の中国語ネイティブ達も、翻訳者達と同じような指示詞選択をするのだろうか、それとも異なる選択をするのか、という疑問が残る。

以上のような疑問点を解決するために、本研究ではアンケート方式を採用し、大陸と台湾の中国語ネイティブ達の指示詞使用実態を調査する。それによって、鈴木（2011）の主張する大陸と台湾の遠近認知の違いを検証したいと考える。

### 3. 調査方法

アンケート調査は、以下の4つに示したような実施内容や実施状況の下で行われた。

#### 3.1. 調査内容

鈴木（2011）によると、小説『ノルウェイの森』の中の指示詞「これ・それ・あれ」に関する大陸版訳と台湾版訳を比較したとき、両版において指示詞使用の違いを一番顕著に示していたのが「それ」の訳であった。具体的に言えば、大陸版では近称の“这”を多く使う傾向があり、台湾版では遠称の“那”を多く使う傾向が認められた。そこで、このアンケート調査でも被験者達に「それ」が訳されている部分で、“这・那”のうちどちらの指示詞を使うか尋ねることにした。まず『ノルウェイの森』の中で指示詞「それ」が使われている文で、しかも大陸版では“这”を使い、台湾版では“那”を使って訳されている5か所を取り出した。これら5か所のそれぞれに対し、大陸版訳と台湾版訳の2つの訳を用意し、指示詞が使われている部分を（这，那）のような選択形式にして、被験者達に自分が適当と思う指示詞を選択してもらった。当然のことながら、被験者達には、どんな小説の翻訳であるか、また元の翻訳においてどちらの指示詞が使われていたか、という情報は与えられていない。

#### 3.2. 調査対象者

調査対象者は、大陸の方は天津師範大学の大学生、男子20名、女子20名の合計40名である。年齢は20から23歳までであった。一方台湾の方は、台北にある国立台湾師範大学の大学生、男子20名、女子20名の合計40名である。こちらの年齢は20から22歳までである。

#### 3.3. 調査時期と調査場所

調査時期は、天津の方が2011年9月22、23日、天津師範大学の教室で行われた。台湾の方は2011年12月25、26日、国立台湾師範大学国文系の教室で行われた。

#### 3.4. アンケート用紙

アンケートの調査項目は全部で5項目からなり、すべて『ノルウェイの森』の中で日本語指示詞「それ」が使われている部分の中国語訳を取り上げた。

各項目はa, bの2つの小項目に分かれていて、aは林少華による大陸版訳で、bは頼明珠による台湾版訳である。もとの翻訳の中で、aの林訳ではすべて“这”を使って訳されていて、一方bの頼訳ではすべて“那”を使って訳されている。被験者達には、出典も含めてこの事実は知らせていない。また、大陸版訳と台湾版訳の区別ができないようにするために、大陸で調査するときにはすべて簡体字で表現し、台湾で調査するときにはすべて繁体字に直した。

選択してもらった指示詞の部分は、（这／那）[天津の調査用紙] 或いは（這／那）[台北の調査用紙]の形式で選択肢を示し、さらに選択項目であることを明示するため字体を拡大し、更に太字にした。被験者には自分が適当と思う指示詞を丸で囲んでもらうことにした。

また被験者の言語環境に関する情報を収集するために、大陸版のアンケート用紙では、被験者の母語が「北方語」、「南方語」、「その他」のいずれかを選択または記入してもらい、一方台湾版のアンケート用紙では、被験者が家族とコミュニケーションをとる際の言語として、「国語」、「台湾語」、「その他」のうちから選択または記入してもらうことにした。これによって被験者の普段使っている言語が、指示詞選択に影響しているのか或いは影響していないかを調査する計画であった。しかし結果は、天津ではほとんどが「北方語」を選び、台北ではほとんどが「国語」を選んだため、指示詞選択についての影響は不明である。尚、アンケート用紙は本稿の最後に添付してある。

#### 4. 調査結果の統計

今回のアンケート調査では、天津師範大学の学生、男女各 20 名の合計 40 名、また国立台湾師範大学の学生も同数で、天津と台北で合計 80 名の学生が回答に協力してくれた。調査項目は全部で 5 項目で、5 項目のそれぞれに 2 つずつの大陸版と台湾版の訳および選択肢が付いているので、選択肢の

表 1 アンケート調査の基礎データ

地域, 男女, 合計		天 津			台 北			
		男 20	女 20	合計 40	男 20	女 20	合計 40	
(1)	a	这	13 (65%)	16 (80%)	29 (72.5%)	15 (75%)	16 (80%)	31 (77.5%)
		那	7 (35%)	4 (20%)	11 (27.5%)	5 (25%)	4 (20%)	9 (22.5%)
	b	这	14 (70%)	7 (35%)	21 (52.5%)	10 (50%)	6 (30%)	16 (40%)
		那	6 (30%)	13 (65%)	19 (47.5%)	10 (50%)	14 (70%)	24 (60%)
(2)	a	这	18 (90%)	16 (80%)	34 (85%)	17 (85%)	18 (90%)	35 (87.5%)
		那	2 (10%)	4 (20%)	6 (15%)	3 (15%)	2 (10%)	5 (12.5%)
	b	这	12 (60%)	10 (50%)	22 (55%)	9 (45%)	12 (60%)	21 (52.5%)
		那	8 (40%)	10 (50%)	18 (45%)	11 (55%)	8 (40%)	19 (47.5%)
(3)	a	这	17 (85%)	13 (65%)	30 (75%)	5 (25%)	8 (40%)	13 (32.5%)
		那	3 (15%)	7 (35%)	10 (25%)	15 (75%)	12 (60%)	27 (67.5%)
	b	这	8 (40%)	9 (45%)	17 (42.5%)	10 (50%)	10 (50%)	20 (50%)
		那	12 (60%)	11 (55%)	23 (57.5%)	10 (50%)	10 (50%)	20 (50%)
(4)	a	这	14 (70%)	10 (50%)	24 (60%)	9 (45%)	11 (55%)	20 (50%)
		那	6 (30%)	10 (50%)	16 (40%)	11 (55%)	9 (45%)	20 (50%)
	b	这	6 (30%)	10 (50%)	16 (40%)	8 (40%)	7 (35%)	15 (37.5%)
		那	14 (70%)	10 (50%)	24 (60%)	12 (60%)	13 (65%)	25 (62.5%)
(5)	a	这	14 (70%)	14 (70%)	28 (70%)	16 (80%)	12 (60%)	28 (70%)
		那	6 (30%)	6 (30%)	12 (30%)	4 (20%)	8 (40%)	12 (30%)
	b	这	9 (45%)	8 (40%)	17 (42.5%)	11 (55%)	12 (60%)	23 (57.5%)
		那	11 (55%)	12 (60%)	23 (57.5%)	9 (45%)	8 (40%)	17 (42.5%)

総数は10となる。男女それぞれ延べ200回“这”或いは“那”を選択し、天津と台北の両地点でそれぞれ延べ400ずつの“这”或いは“那”の選択結果が得られた。

回答結果は表1のようにまとめられる。表中、aは大陸版訳、bは台湾版訳を表す。また、括弧外の数字は、“这”或いは“那”を選択した人数で、括弧内はその割合を百分率で示してある。

## 5. 項目ごとの分析

本節では、調査項目ごとに調査結果を分析する。それぞれの項目には日本語の原文と、aとして林少華による大陸版訳、bとして頼明珠による台湾版訳を付けた。大陸版訳aではすべて“这”を使って訳されていて、台湾版訳bではすべて“那”を使って訳されている。ここでは調査用紙と同じように(这/那)と書くことにする。また、項目ごとの調査結果を、前節の表をもとにグラフで示した。

調査項目1の原文とa、b2つの中国語訳は次のようなものである。

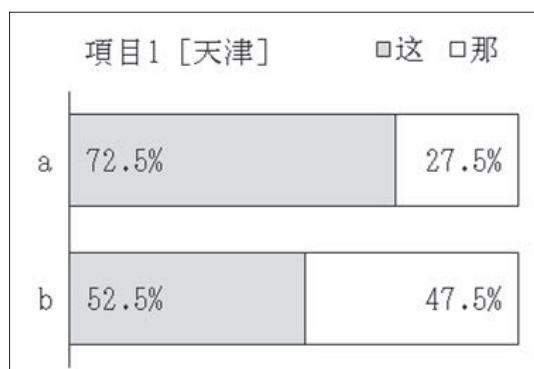
(1) 「今も言ったでしょ？ 人は何かのことで嘘をつく、それにあわせていっぱい嘘をつかなくちゃならなくなるのよ。それが虚言症よ。」 (『ノルウェイの森』上 p.252)

a. “刚才说了吧，人若要在某件事上扯谎，就势必为此编造出一大堆相关的谎言。(这/那)就是说谎症。” (林 p.147)

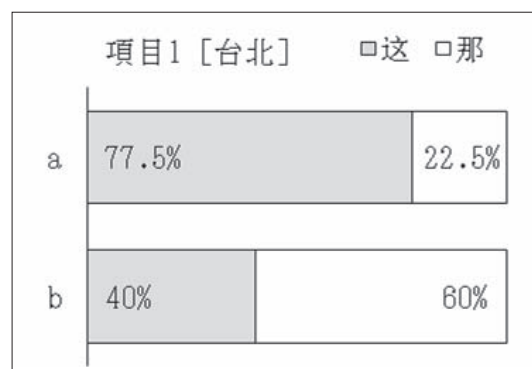
b. “我刚刚也說過吧？人要是說了什麼謊，就不得不配合那個說出一大堆謊吧。(這/那)叫做虛言症噢。” (頼・上 p.170)

原文は会話文で、先行文中の「人は何かのことで嘘をつく、それにあわせていっぱい嘘をつかなくちゃならなくなる」を、後続文の文頭で「それ(が)」によって指す文脈指示である。

グラフ 10



グラフ 11



大陸版訳aでは、天津、台北ともに70%を上回って“这”を選択している。更に台北の“这”の割合が、天津の“这”の割合よりもやや多い。ところが台湾版訳bでは、天津、台湾ともに“这”の割合はかなり少なくなって、天津では20ポイント減って52.5%、台北では37.5ポイント減って40%となっている。また大陸版訳のときとは逆に、天津の“这”の割合が、台北の“这”の割合より



も多くなっている。aとbの2つの訳を比較すると、明らかに訳の違いが、天津においても台北においても、“这・那”の選択に影響を与えているのが分かる。

調査項目2の原文、中国語訳は次のようなものである。

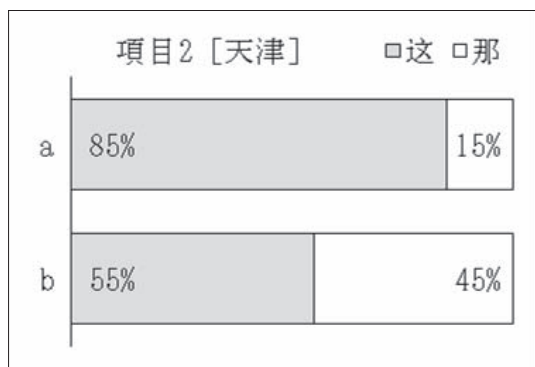
(2) 「世の中というのは原理的に不公平なものなんだよ。それは俺のせいじゃない。はじめからそうになっているんだ。……」  
 (『ノルウェイの森』下 p.113)

a. “社会这东西，从根本上就是不公平的。(这／那)不能怪我，本来就是这样。……” (林 p.241)

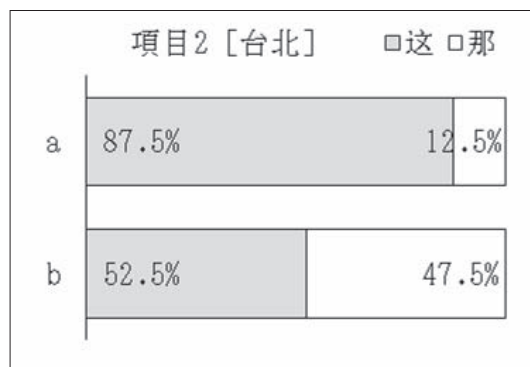
b. “世間本來就是不公平的。(這／那)不能怪我。一開始就是這樣了。……” (頼・下 p.81)

原文では、先行する会話文の中の「世の中というのは原理的に不公平なものなんだ」を、後続文の文頭で「それ(は)」によって指す文脈指示である。文の構造は項目1と同じで、指示詞が「それが」から「それは」に替わっただけである。中国語には日本語の「は」、「が」のような助詞がないので、項目1の「それが」と項目2の「それは」は中国語訳上では区別できない。

グラフ 12



グラフ 13



大陸版訳aでは、項目1のときよりも“这”の割合は増え、天津で85%、台北で87.5%までに達している。また、項目1のときと同様に、台北の“这”の割合の方が天津の“这”の割合よりもわずかに多くなっている。

台湾版訳bでは、天津の“这”の割合は55%と、大陸版訳aに比べ30ポイント減少し、台北の“这”の割合は52.5%で、大陸版訳aに比べ35ポイントも減少している。ここでも項目1のときと同様に、訳の違いが“这・那”の選択に影響を与えているのが分かる。また、天津の“这”の割合が、台北の“这”の割合よりもわずかに多くなっている。

調査項目3の原文、中国語訳は次のようなものである。

(3) 「すぐにぐっすり寝ちゃったわ。あるいは寝たふりしたのかもしれないけど。でもまあどっちにしても、すごく可愛い顔してたわよ。なんだか生まれてこのかた一度も傷ついたことのない十

三か十四の女の子みたいな顔をしてね。それを見てから私も眠ったの、安心して。」

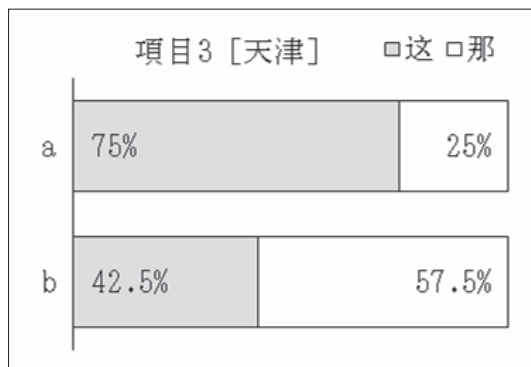
(『ノルウェイの森』下 p.275)

a. “她马上静静地睡了，或者说是装睡。但不管怎样，那张脸实在叫人怜爱，就像生来从未受伤的十三四岁的孩子脸。见她（这／那）样，我也放心地睡了。” (林 p.336)

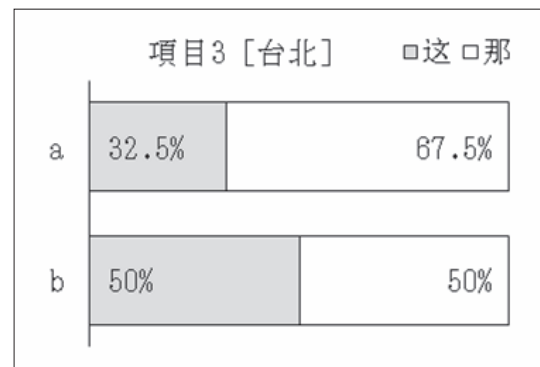
b. “她立刻就沉沉地睡著了。或許是裝成睡著的也不一定。不過不管怎麼樣，那臉都非常可愛。看起來簡直像從出生之後一次也沒受過傷的十三，四歲女孩子的臉一樣噢。看她（這／那）樣之後我也就安心睡了。” (賴・下 p.191)

原文は、話し手のハツミが回想しながらルームメイト直子の寝顔を描写し、最後の文の文頭で「それ(を)」を使って、直子の寝顔を指している。ハツミが話している現場には直子はいないので文脈指示である。

グラフ 14



グラフ 15



結果的に言うと、台北における大陸版訳 a の結果には、5 項目の調査結果のうちで、他の 4 項目と一番大きな違いが現れている。異なる点は次の 3 つである。

1 つ目は、“这”の割合が 32.5% で、“那”の割合 67.5% より 35 ポイントも少ない。他の 4 項目の台北における大陸版訳 a の結果は、すべて“这”の割合の方が多かった。

2 つ目は、台北における大陸版訳 a と台湾版訳 b を比べると、台湾版訳 b の“这”の割合が 50% で、大陸版訳 a の“这”の割合 32.5% より 17.5 ポイント多い。他の 4 項目ではすべて、大陸版訳 a の“这”の割合が、台湾版訳 b の“这”の割合より多かった。

3 つ目は、大陸版訳 a の天津と台北を比べると、天津の“这”の割合が 75%、台北の“这”の割合が 32.5% で、台北の“这”の割合が 32.5 ポイントも少ない。

この現象は次の項目 4 でも現れるが、項目 3 では大差となっている。これは同じ大陸版訳どうしで起こっている差なので、この原因は訳の違いによるものではなく、天津と台北の学生がもっている遠近感の違いが大きく現れていると考えられる。

項目 1, 2 の結果では、“这”の割合が多いのは、大陸版訳 a では台北、台湾版訳 b では天津であったが、項目 3 では、大陸版訳 a では天津、台湾版訳 b では台北と逆になっている。天津と台北のどちらで“这”の割合が多くなるかについては、天津が台北よりも多くなることもあるし、逆に台北の方が天津よりも多くなることもあることが分かった。これに関しては、第 7 節において再び、全体



として天津と台北のいずれが多くなるかを見ることにする。

調査項目4の原文、中国語訳は次のようなものである。

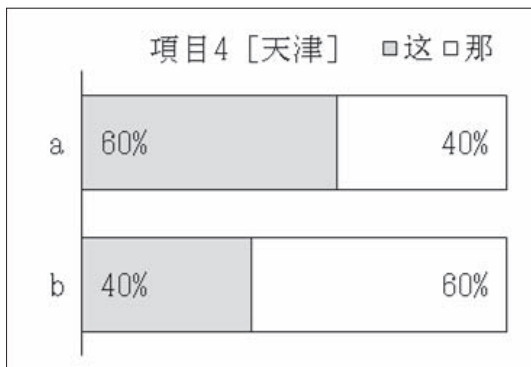
(4) いったい自分が今何をしているのか、これから何をしようとしているのかさっぱりわからなかった。大学の授業でクロードルを読み、ラシーヌを読み、エイゼンシュテインを読んだが、それらの本は僕に殆ど何も訴えかけてこなかった。(『ノルウェイの森』上 p.63)

a. 若問自己现在所做何事，将来意欲何为，我都如坠雾中。大学课堂上，读克洛岱尔，读拉辛，读爱森斯坦，但（这／那）些书几乎对我没有任何触动。（林 p.34）

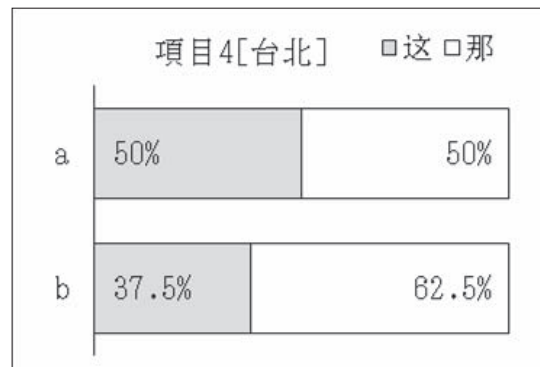
b. 自己現在到底在做著什麼，往後將要做什麼，我完成不知道。大學的課程中我讀了克勞岱，讀了拉辛，讀了艾森斯坦，但是（這／那）些書幾乎對我沒發生什麼作用。（賴・上 p.46）

原文では、直前に出てくる3人の名前クロードル、ラシーヌ、エイゼンシュテインによって彼らの著作を表し、「それ（らの本）」でその著作を指している。調査項目1から調査項目3まではすべて会話文における指示であったが、この調査項目4と次の項目調査5は、地の文における文脈指示である。

グラフ 16



グラフ 17



結果は、調査項目1, 2と同じような様子を見せている。“这”の割合が、大陸版訳aでは天津で60%、台北で50%であったのが、台湾版訳bになると、天津が40%と20ポイント減少し、台北でも37.5%と12.5ポイント減少している。ここでも大陸版訳aと台湾版訳bとの違いが、“这・那”の選択に影響を与えていると言える。また、“这”の割合を天津と台北で比べると、aの大陸版訳では天津が60%であるのに対し、台北は50%と10ポイント少なく、bの台湾版訳でも天津が40%であるのに対し、台北は37.5%と2.5ポイントとわずかに少ない。

a, bいずれも、天津の方が台北よりも“这”を多く選択している。これは同じ訳で比較しているので、天津と台北の学生の距離感の違いが現れていると考えられる。

調査項目5の原文、中国語訳は次のようなものである。

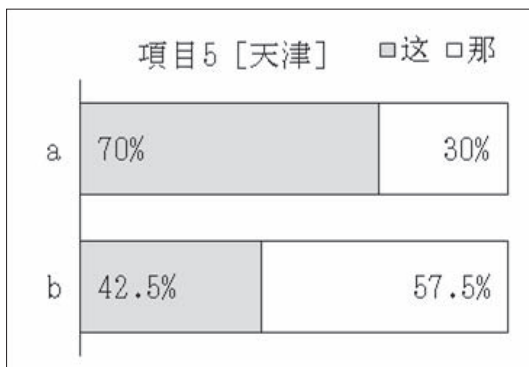
(5) あたたかいベッドの中で君のことを考えているのはとても気持ちの良いものです。まるで僕のと  
なりに君がいて、体を丸めてぐっすり眠っているような気がします。そしてそれがもし本当だっ  
たらどんなに素敵だろうと思います。 (『ノルウェイの森』下 p.104)

a. 在温暖的被窝里想你是十分惬意的事。恍惚觉得你就在我的身边，弓着身子睡得很熟很熟。  
倘若（这／那）是真的，那该多美呀！ 我想。 (林 p.235)

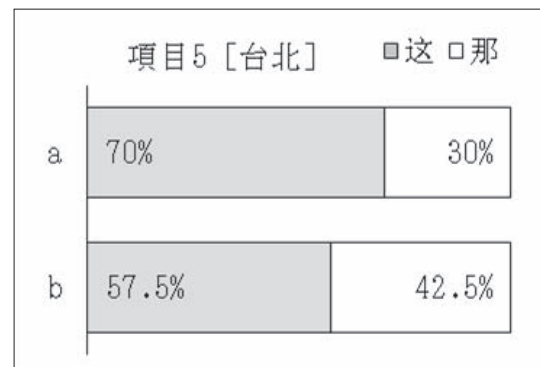
b. 躺在温暖的床上想著妳心情非常舒服。覺得好像妳就在我身旁，縮著身體沉沉地睡著似  
的。並想道如果（這／那）是真的話該有多美好啊。 (賴・下 p.73)

原文は、小説中に出てくる手紙の中の文章である。先行文中の「まるで僕のとなりに君がいて、体を丸めてぐっすり眠っているような気がします」という想像を、後続文の中の「それ（が）」によって指す、文脈指示である。

グラフ 18



グラフ 19



項目 1, 2, 4, と同様に, “这” の割合は, 大陸版訳 a では天津も台北も 70% であるが, 台湾版訳 b では天津が 42.5% と 27.5 ポイント減少し, 台北も 57.5% と 12.5 ポイント減少している。ここでも訳の違いが“这・那”の選択に影響していると考えられる。台湾版訳 b の“这”の割合は, 台北が 57.5%, 天津が 42.5% で, 台北の方が 15 ポイント多い。

5 項目の調査結果を総合して, 次の 3 つのことが分かる。

①調査項目 3 と 4 の台北における調査結果を除き, 残りの 8 つの調査結果では, 大陸版訳 a ではすべて“这”が“那”より多く選択されている。これにより大陸版訳 a については, 天津はもちろん台北でも, “这”が選択されやすいのが分かる。それに対して, 台湾版訳 b の方は, 天津でも台北でも, “这”が“那”より多いときもあればまたその逆のときもあり, はっきりした違いは現れていない。

②同一の項目で比較すると, 大陸版訳 a では“这”を多く選択していたのが, 台湾版訳 b になると“这”を選択する割合が減少している。これは調査項目(3)の台北を除いて, 残りの 9 つの調査結果すべてで起こっている。このことにより, 大陸版訳 a と台湾版訳 b の違いが“这・那”の選択に影響していることが明確に分かる。

③調査項目 3 の大陸版訳 a においては, 天津と台北の“这”の割合が, 調査結果の中で一番大きな

差となって現れた。実際、天津では75%も選択しているのに、台北では32.5%しか選択しておらず、実に32.5ポイントの差が現れた。これは同じ大陸版訳a どうしで比較しているので、上の①のように、訳の違いが影響しているとは考えられない。従って、ここには天津と台北の学生の指示対象に対する距離感の違いが反映されていると考えられる。

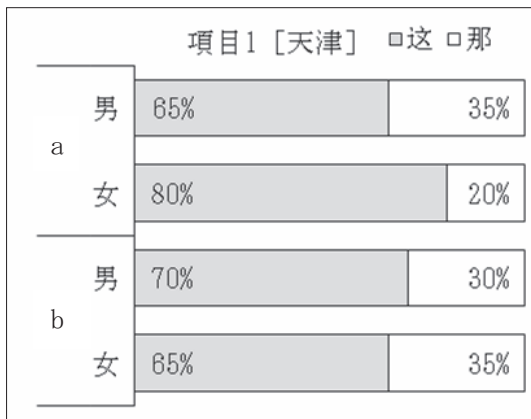
## 6. 男女別による分析

男女の違いが“这・那”の選択に影響を与えるであろうか、それとも全く影響しないのか。もし男女の違いが“这・那”の選択に影響を与えるならば、それはどのような違いとなって現れるのであろうか。本節では、大陸版訳aと台湾版訳b、天津と台北に分けて、男女別に調査結果を分析する。

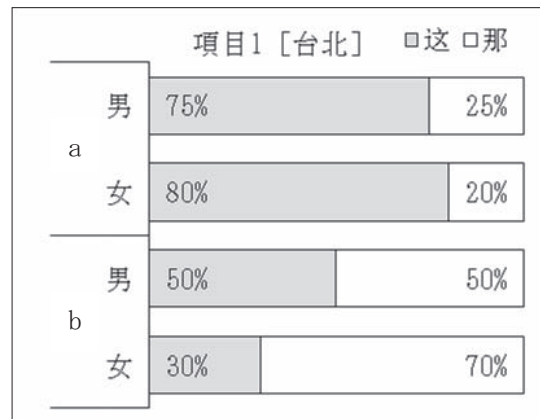
調査項目1については、天津の“这”の割合は、大陸版訳aで男子が65%、女子が80%で、女子の方が男子より15ポイント多いが、台湾版訳bでは男子が70%、女子が65%で、逆に男子の方が5ポイント多い。一方、台北の“这”の割合は、大陸版訳aで男子が75%、女子が80%で、女子の方が男子より5ポイント多いが、台湾版訳bでは男子が50%、女子が30%で、逆に男子の方が20ポイント多い。

調査項目1については、“这”の割合は、天津、台北ともに、大陸版訳では女子の方が多く、台湾版訳では男子の方が多かった。

グラフ 20

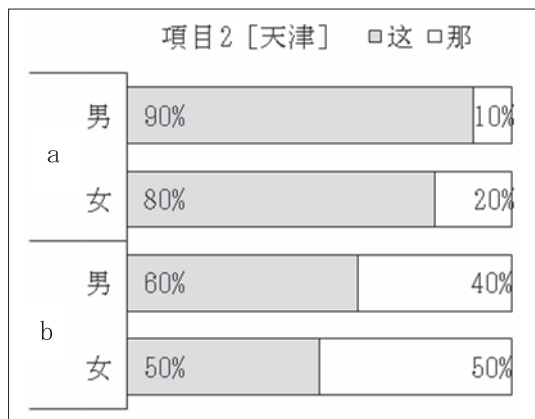


グラフ 21

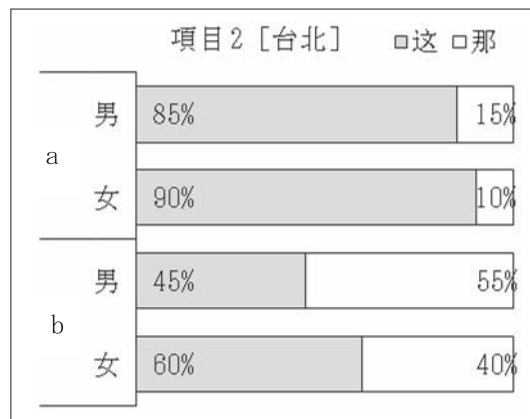


調査項目2については、天津の“这”の割合が、大陸版訳aで男子が90%、女子が80%で、男子の方が女子よりも10ポイント多く、また台湾版訳bでも男子が60%、女子が50%で、やはり男子の方が10ポイント多い。大陸版訳と台湾版訳の両方で、天津は男子が女子より多く“这”を選択している。一方台北の“这”の割合は、大陸版訳aで男子が85%、女子が90%で、女子の方が男子より5ポイント多く、また台湾版訳bでも、男子は45%、女子は60%で、女子の方が男子より15ポイント多い。大陸版訳と台湾版訳の両方で、台北は天津とは逆に、女子が男子より多く“这”を選択している。

グラフ 22

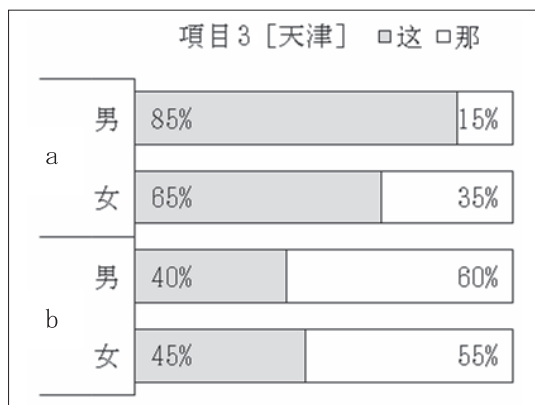


グラフ 23

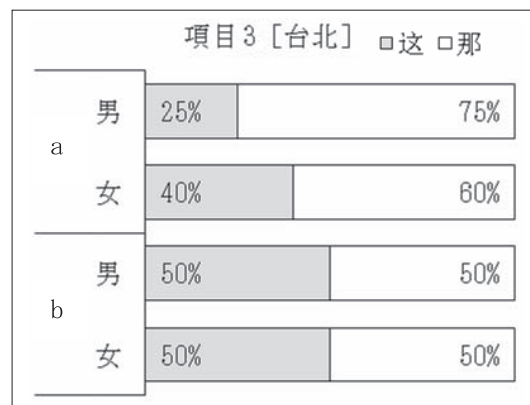


調査項目3については、天津の“这”の割合を見ると、大陸版訳aでは男子が85%、女子が65%で、男子の方が女子より20ポイント多いが、台湾版訳bでは男子が40%、女子が45%で、逆に女子の方が5ポイント多い。一方台北の“这”の割合は、大陸版訳aで男子が25%、女子が40%で、女子の方が15ポイント多い。ところが台湾版訳bでは、男女とも50%と同じ割合になった。結果的に男女の割合が同じになったのは、これと下の調査項目5の天津における大陸版訳aの2つだけである。

グラフ 24



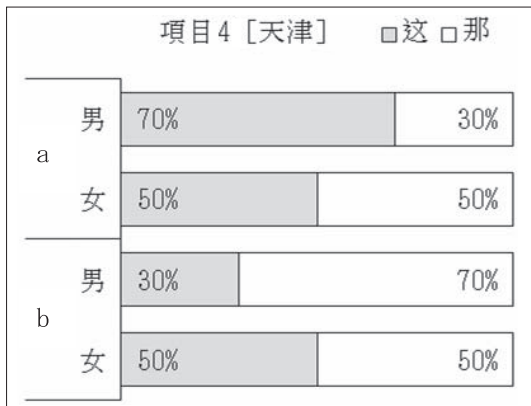
グラフ 25



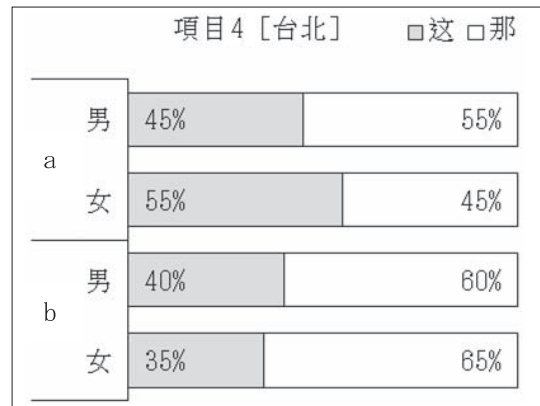
調査項目4については、天津の“这”の割合が、大陸版訳aについては男子が70%、女子が50%で、男子が女子より20ポイント多い。しかし台湾版訳bについては男子が30%、女子が50%で、女子の方が逆に20ポイント多くなっている。一方台北の“这”の割合は、大陸版訳で男子が45%、女子が55%で、女子の方が10ポイント多く、台湾版訳bでは男子が40%、女子が35%で、男子の方が5ポイントだけ多い。

項目4の“这”の割合には、天津と台北、大陸版訳と台湾版訳で比べたときの、結果のパターンがすべて含まれている。天津の大陸版訳aで男子が女子より多いときは、台北の大陸版訳ではちょうどその逆になっていて、天津の台湾版訳bで女子が男子より多いときは、台北の台湾版訳ではちょうどその逆になっている。“这”の割合が男女どちらで多くなるかということに関しては、項目3の台北における「等しい」場合も含めて、天津と台北、大陸版訳と台湾版訳のそれぞれであらゆる場合の起こることが分かる。

グラフ 26

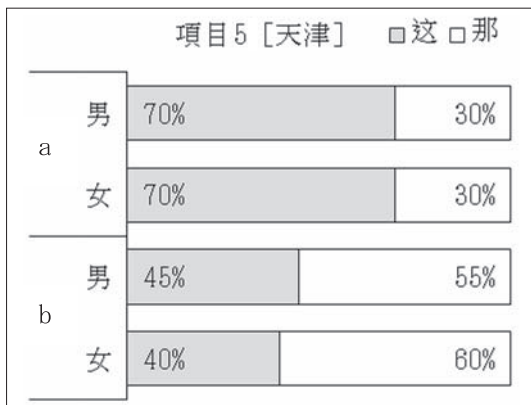


グラフ 27

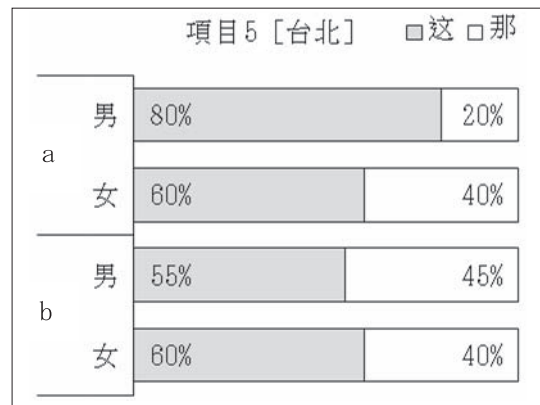


調査項目5については、天津の“这”の割合が、大陸版訳では男女とも70%、台湾版訳bでは男子が45%、女子が40%で、男子の方が5ポイント多い、一方台北の“这”の割合は、大陸版訳aでは男子が80%、女子が60%で、男子の方が20ポイント多く、台湾版訳bでは男子が55%、女子が60%で、女子の方が5ポイントだけ多い。項目3の台北における台湾版訳bの結果と同様に、この項目の天津における大陸版訳aでも、男女の割合が同数になっている。

グラフ 28



グラフ 29



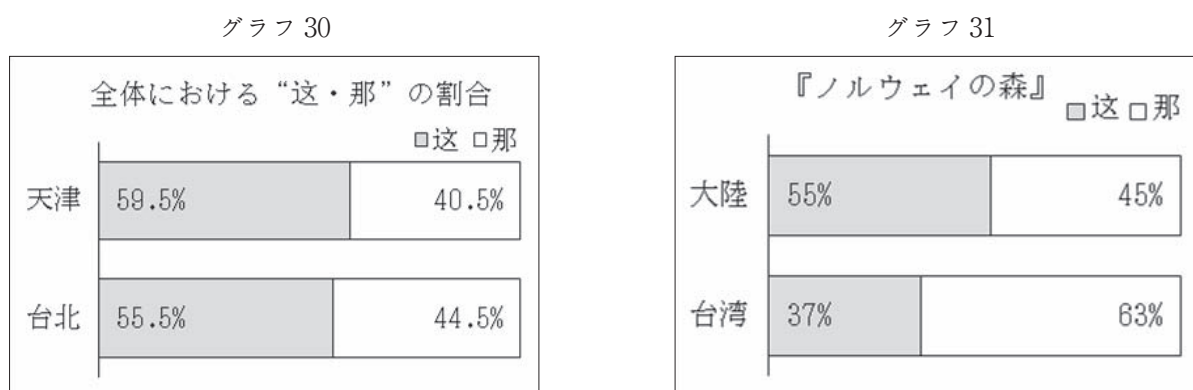
5つの調査項目をそれぞれ個別に見ていくと、天津と台北、大陸版訳aと台湾版訳bとの間で、男女の“这・那”の選択には、全く差がないものや20ポイントの大きな差を示すものまであることが分かった。しかし、“这”を男女のうちどちらが多く選択するかについては、男子の方が多くなったり、女子の方が多くなったりして、この段階では、はっきりした傾向が現れていない。これについては次節の全体の傾向のところ、天津と台北における、男子200、女子200の回答から男女の傾向を探ることとする。

## 7. 調査結果の総合的分析による傾向

本節では、個々の調査項目ごとではなく、調査結果を総合して、天津と台北の比較、翻訳の違いによる比較、男女別による比較、の3つの比較から分析する。

## 7.1. 天津と台北の比較

“这・那”に関する10個の選択肢について、項目も、訳の違いも、男女も区別することなく、天津と台北のそれぞれ40名の学生が“这”或いは“那”を選択した結果をグラフで表したのがグラフ30である。これは天津と台北の2地点でそれぞれ延べ400の回答結果をグラフにしたものである。第1節で示した『ノルウェイの森』の“这・那”の割合と比較できるように、右側に再度グラフ（グラフ31）を付けた。



全体の結果を見ると、天津と台北の数値は接近しているものの、天津の“这”の割合59.5%、台北の“这”の割合55.5%で、天津の方が台北よりも4ポイント“这”の割合が多く、鈴木（2011）における『ノルウェイの森』の調査から得られた1つの結果である「“这”の割合は、大陸版の方が台湾版よりも多い」を、このアンケート結果も支持していることが分かった。

## 7.2. 翻訳別の比較

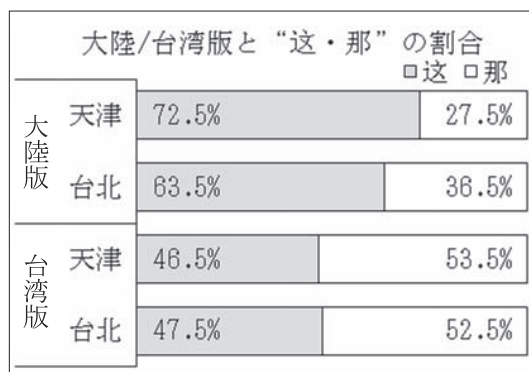
次に調査全体を、大陸版と台湾版の訳の違いに着目してまとめたのがグラフ32である。大陸版訳と台湾版訳では、はっきりした違いが現れていて、結果は次の2点にまとめられる。

①大陸版訳では、天津と台北の両方で“这”が“那”より多く選択されている。一方台湾版訳では、天津と台北の両方で“这”より“那”の方が多く選択されている。この結果から、訳の違いが“这・那”の選択に影響を与えていて、大陸版訳には台湾版訳よりも“这”を多く選択させる要因があることが分かる。

②大陸版訳では、天津と台北の間で“这”の選択に差があり、天津の方が台北よりも9ポイント多く“这”を選択している。これは同じ訳で比較しているので当然訳の違いが原因とは言えず、天津と台北の学生の指示対象に対する距離感の違いが反映されていると考えられる。一方台湾版訳では、天津と台北の“这”を選択する割合はほぼ同じである。従って、天津と台北で、“这・那”の選択に差がある場合とほとんど差がない場合があり、差がある場合には、天津は台北よりも多く“这”を選択していることが分かった。



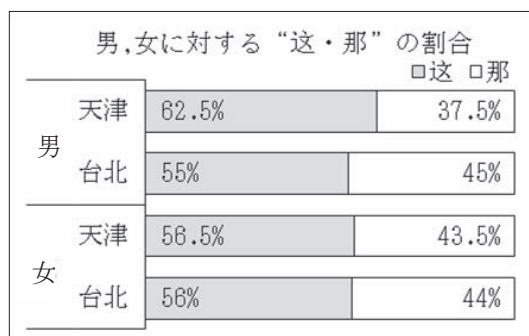
グラフ 32



### 7.3 男女別の比較

前節6では、調査項目ごとに男女の“这・那”選択の割合を調べたが、そこでは男女別によるはっきりした差が見えてこなかった。しかし調査結果を総合してみると、男女別による“这・那”選択の差が、天津と台北で浮かび上がってきた。グラフ33は、天津と台北で、男女それぞれ延べ200の“这・那”選択の割合を表したものである。すぐに分かることは、天津の男子が他に比べて“这”を多く選択していることである。また、天津の男女と台北の男女を比べると、天津の男女では同じ地域であるにもかかわらず男女間で“这”の選択に差が見られるが、台北の男女間では“这”の選択にほとんど差が見られない。

グラフ 33



郭（2009）では、談話標識の“这个（この）・那个（その・あの）”について、性別、職業別（学生か非学生か）、年齢別（30歳以下か31歳以上か）の3つの観点から使用実態を調査している。郭が使用した資料は、北京語言大学が作成した「当代北京口語語料」で、これは北京市内の5地点で312人から採取した録音資料に基づいて作成されたものである。そのうち性別に関しては、表2のような興味深い調査結果を発表している。

表2 “这个”，“那个”使用的性别分布

如何用的		分布与比例		男性		女性	
		数量(人)	%	数量(人)	%		
项目1	只使用了“这个”	42	29.17	2	1.22		
	只使用了“那个”	9	6.25	50	30.49		
	这个都使用了	93	64.58	112	68.29		
	合计	144	100	164	100		
项目2	都用时	这个 > 那个	71	76.35	25	22.32	
		那个 > 这个	12	12.90	71	63.39	
		这个 ≈ 那个	10	10.75	16	14.29	
		合计	93	100	112	100	

(郭2009 p.432)

从性别角度看，“那个”是女性常用的话语标记，“这个”是男性常用的话语标记。从职业角度看，“那个”是学生常用的话语标记，非学生使用“这个”的比例略高于“那个”，但尚不能由此说“这个”就是非学生常用的话语标记。从年龄角度看，“那个”是30岁（含以下者）常用的话语标记，“这个”则是31岁（含以上者）常用的话语标记。（郭2009 p.436）

(性別の角度からみると，“那个”は女性が常用する談話標識で，“这个”は男性が常用する談話標識である。職業の面から見ると，“那个”は学生が常用する談話標識で，非学生が“这个”を使用する割合は“那个”よりもわずかに高い，ただしこのことから“这个”が非学生の常用する談話標識であるとはまだ言えない。年齢の角度から見ると，“那个”は30歳（それ以下の者を含む）の者が常用する談話標識であり，“这个”が31歳（それ以上のものを含む）の者が常用する談話標識である。)

談話標識の“这个（この）・那个（その・あの）”には，指示機能がほとんど残っていないが，もともと指示詞の“这个・那个”から派生したものである。郭の調査結果と本調査結果を直接に関連付けることはできないが，郭が言うように“这个”が男性の常用する談話標識で，“那个”が女性の常用する談話標識であるならば，このアンケート調査で天津において男子の“这”の選択が女子の“这”の選択よりも多かったという事実は，何らかの関連性があると考えられる。一方，台北では男女間に“这”の選択について差がほとんど見られない。性別と“这・那”選択の違いについては，更なる調査が必要と考える。

## 8. 中国語指示詞“这・那”と遠近について

中国語の指示詞“这・那”とその遠近については，これまでどのように捉えられてきたのであろうか。

吕叔湘は「近代汉语指示词」の中で次のように記している。

这和那，一个指近，一个指远，本是对待的。……近指和远指的分别，基本上是空间的，但也往往只是心理的。（《吕叔湘全集》第三卷 p. 155）

（这与那，一方が近くを指し，もう一方が遠くを指して，もともと相対的なものである。……近く指すか遠く指すかの区別は，基本的には空間的なものであるが，しばしば心理的なこともある。）

吕は，指示対象が（話し手の）近くにあれば“这”で指し，（話し手から）遠くにあれば“那”で指すとしている。そして，“这”を使うか“那”を使うかの区別は，基本的に空間的（距離）によるが，時には心理的（距離）によることもあるとしている。

しかし徐丹（1988）では，“这・那”の使い分けが空間的距離以外の要因で決まることもあると記している。徐の研究は“这・那”の非対称性に関する研究で，その中で「時間」，「人称代名詞」，「動詞“来・去”との組合せ」等も“这・那”の選択に影響を与えることを示している。以下に徐が示した例を採り上げるが，例文中の下線は筆者による。

時間に関しては，過去を表す表現として，“这／那年他上了大学。”や“这／那天他病了。”は可能であるが，“那个月他出差了。”や“那星期我放假了。”は可能であっても，“这个月他出差了。”や“这星期我放假了。”は過去を表す表現としては使えないとしている。これらは空間的距離ではなく，時間を表す語彙が“这・那”の選択に影響を与えている例である。

人称代名詞に関しては，“这”については“我这个人”，“你这个人”，“他这个人”は言えるが，“那”に関しては“他那个人”は言えても“我那个人，你那个人”は言えないとしている。これらも空間的距離ではなく，直接的には人称代名詞が“这・那”の選択に影響を与えている例である。

動詞“来・去”との組合せについては，“我去过上海，在那儿住过一个月。”や“我来过上海，这儿有我一个表哥。”の“那儿”，“这儿”を入れ替えることはできないとしている。話し手と聞き手が同じ場所にいるとき，動詞“去”や“来”の方向性が“这・那”の選択を規定しているとしている。これらも直接的には空間的距離ではなく，動詞“去”や“来”との組合せが，“这・那”の選択に影響を与えている例である。

また，Hongyin Tao（陶红印 1999）では，吕が言っているような空間的距離による“这・那”の使い分けを認めつつも，それだけでは“这・那”の使い分けは十分に説明できないとしている。Taoは3人の中国人学生の談話を分析して，談話における“这・那”の使い分けに影響する要素として，空間的距離の他に更に次の5つの要因を挙げている。

- (1) the shift of discourse structures（談話構造の変更）
- (2) discourse properties of the focused referent（焦点化した指示対象の談話特性）
- (3) the building of text（文脈の構築）
- (4) the speaker's assumption about the hearer（話し手の聞き手に対する想定）
- (5) the speaker's attitude toward the referent（指示対象に対する話し手の態度）

このように“这・那”の使い分けに対しては，吕の言うような話し手からの空間的距離による分類

では説明しきれない事実がすでに示されている。しかし一旦“这・那”が選択されると、その“这・那”にはやはり空間的遠近感が付随していると王亚新は説明している。王亚新（2006）において次のように説明されている。

由于汉语指示词是基于对空间距离的认知，所以它在表示指称时带有很强的“远近感”。即使当空间指称转变为对时间，话题等更为抽象的对象指称时，这种源自空前距离的远近感仍然会附着在“这／那”上。（王亚新 2006p.27）

（中国語の指示詞は空間距離に対する認知に基づいているため、指示を表す際には強い「遠近感」を伴っている。たとえ空間的指示が時間や話題などの更に抽象的な対象の指示に変わったとしても、このような空間距離に由来する遠近感は依然として“这／那”の上に付帯しているのである。）

王の説明によれば、指示が文脈指示のような目の前に存在しないものを指す場合でも、中国語指示詞“这・那”には遠近の違いが存在することになる。従って、現場指示であろうが文脈指示であろうが、どちらの指示詞を使うかにより、その指示詞の使い手の対象に対する遠近感が分かるのである。

このアンケート調査では、小説の文章を利用して調査が行われた。5つの項目の文章における指示詞の用法は、すべて話の現場にないものを指す文脈指示である。しかし王の言うように、そこで選択された“这”或いは“那”にも空間的遠近が依然として反映されているので、“这・那”の使用状況を観察することによって、指示詞使用者の遠近感、つまり指示詞使用者がどのように遠近を認知しているかが分かるのである。

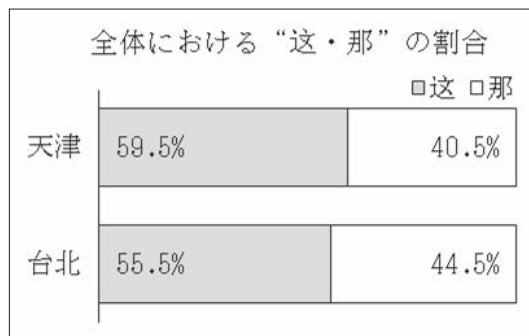
## 9. おわりに

今回のアンケート調査の目的は、鈴木（2011）で示された「“这”の割合は、大陸版の方が台湾版より多い」という、小説『ノルウェイの森』、『東京タワー』に対して行った調査結果を、翻訳者以外のより多くの中国語ネイティブに調査対象を拡大し検証することであった。実際調査を行ってみると、小説の調査結果が検証できたばかりではなく、翻訳の違いや性別が“这・那”選択に影響を与えていることも新たに判明した。そこで最後に、これらの検証や新たな発見について整理し、大陸と台湾の遠近認知の違いについて調査結果をまとめることにする。

### ①鈴木（2011）についての検証

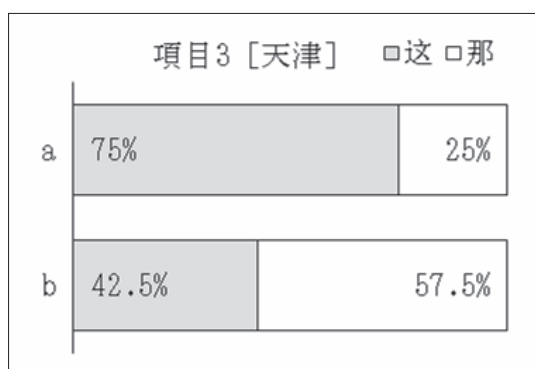
鈴木（2011）では、『ノルウェイの森』の中の指示詞「それ」の“这・那”による訳について、“这”使用割合は大陸版訳の方が台湾版訳よりも多いという調査結果を出していた。アンケート調査の結果においても、数値は接近しているものの、“这”を選択する割合は天津が59.5%、台北が55.5%で、天津の方が台北よりも多い（グラフ34）。これは鈴木（2011）の調査結果を否定するものではなく、鈴木の文字資料による調査を、アンケート調査も支持していると言える。

グラフ 34

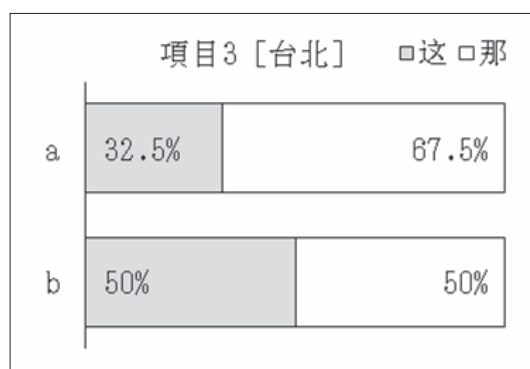


特に調査項目3の大陸版訳についての調査結果では、天津における大陸版訳aの“这”の割合が75%（グラフ35）であるのに対し、台北における同じ大陸版訳aの“这”の割合は32.5%（グラフ36）で、42.5ポイントもの差があった。これは今回の調査において最も天津と台北の差がはっきりと示された部分で、同じ大陸版訳aに対して現れた差なので、天津と台北の学生の指示対象に対する距離感の違いがはっきり現れていると考えられる。

グラフ 35



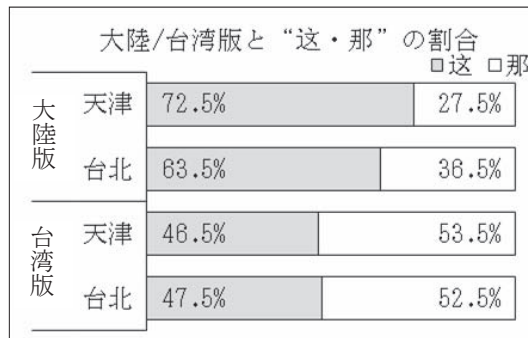
グラフ 36



②調査から新たに分かったこと

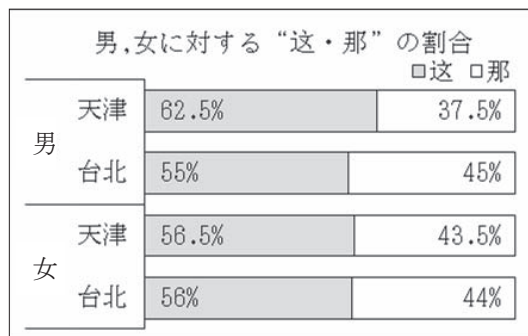
翻訳の違いも、“这・那”の選択に差を生じさせることが分かった。天津でも台北でも、“这”を選択する割合は、大陸版訳の方が台湾版訳よりも多くなっている。実際グラフ37のように、“这”の割合は、天津においては台湾版訳に対しては46.5%であったのが大陸版訳になると72.5%と26ポイント増えていて、一方台北においても台湾版訳に対しては47.5%であったものが大陸版訳では63.5%と16ポイント増えている。この結果から、大陸版と台湾版の訳の違いが“这・那”の選択に影響を与えていることは確かである。では、訳の中のどんな要素が“这・那”の選択に違いをもたらすのであろうか？大陸版訳と台湾版訳の文体や統語的な違い、特定の語彙と“这”或いは“那”との共起性など、いくつかの要因が考えられるが、更なる調査を行ってその原因を追究する必要がある。

グラフ 37



また、男女の性別が、“这・那”の選択に差を与えている可能性があることも分かった。グラフ 38 のように、“这”の選択に関して、台北の男子と女子の間ではほとんど差がなかったが、天津の方で

グラフ 38



は男子が62.5%であるのに対し女子は56.5%と6ポイントの違いが現れた。台北の男女間ではわずか1ポイントの差であったので、それに比べると天津の男女間の差ははっきりしていると言える。これに関しては、指示詞から派生した談話標識の“这个・那个”について、「“这个”は男性が常用する談話標識で、“那个”は女性が常用する談話標識である」という郭（2009）の調査結果がある。今回のアンケート調査により、派生する以前の指示詞“这・那”にも、男女の違いによってその選択に違いが起こる可能性が出てきた。これについても更なる調査が必要である。

王（2006）によれば、中国語の指示詞“这・那”は、強い空間的遠近感を伴っていて、今回のアンケート調査のような指示対象が抽象的な場合にも、依然として“这・那”に空間的遠近感が残っているとされている。そこで、天津と台北における“这・那”選択の違いを、“这・那”のもつ空間的遠近感の面から言い直すと、天津と台北の学生の遠近認知に関して、天津の学生は台北の学生に比べて事物を自分の近くに捉え、逆に台北の学生は天津の学生に比べて事物を遠くに捉えている、と結論付けることができる。

最後に、今回のアンケート調査の意義について記し、本稿を終えることにする。今回のアンケート調査によって、鈴木（2011）の文字資料による調査結果を、中国語ネイティブが指示対象に対して持つ遠近感という非文字の対象を調査することによって検証することができた。更に、2つの新たな発



見ができた。その1つは、大陸版訳と台湾版訳の違いが、“这・那”選択の違いの1つの要因になっていることであり、もう1つは、男女の違いも“这・那”選択に影響する可能性のあることが分かったことである。大陸と台湾の2人の翻訳者の訳を比較しているだけでは、大陸版と台湾版で“这・那”選択に違いがあることが分かったとしても、その違いが何によって引き起こされているか、その原因を探る糸口を見出すことができない。2人の翻訳者だけではなく、男女を含むより多くの中国語ネイティブ達が“这・那”を選択した結果を分析することによって、はじめてこれら2つの発見が可能になったのである。先行研究を別の角度から検証できたことと、2つの新たな発見につながったことが、今回の調査の大きな意義であると考えられる。

#### テキスト

- 村上春樹 2006 『ノルウェイの森』(上・下) 講談社  
 村上春樹 2006 《挪威的森林》(林少华译) 上海译文出版社  
 村上春樹 2003 《挪威的森林》(上・下)(頼明珠译) 時報文化出版  
 リリー・フランキー 2005 『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』 扶桑社  
 リリー・フランキー 2007 《东京塔》(李颖秋译) 中信出版社  
 リリー・フランキー 2007 《東京鐵塔——老媽和我，有時還有老爸》(曹姮译)

#### 参考文献

- 呂叔湘 2002 「近代汉语指代词」《呂叔湘全集》第三卷 辽宁教育出版社 pp.151-201  
 郭岚岚 2009 「北京话话语标记“这个”，“那个”的社会语言学分析」《中国语言》第5期 pp.429-437  
 徐丹 1988 「浅谈这／那的不对称性」《中国语文》第2期 pp.128-130  
 Hongyin Tao (陶红印) 1999 JOURNAL OF CHINESE LINGUISTICS Vol. 27, No1 pp.69-103  
 王亚新 2006 「ソ系指示词的指称功能与汉译」《日语研究》第4辑《日语研究》编委会编 商务印书馆 pp.22-41  
 鈴木進一 2012 「中国大陆と台湾における指示詞の対照研究——“这・那”から見た遠近認知の相違について(その2)——」『言語研究』No.34 神奈川大学言語研究センター pp.135-161  
 鈴木進一 2011 「中国大陆と台湾における指示詞の対照研究——“这・那”から見た遠近認知の相違について——」『人文研究』No.174 神奈川大学人文学会 pp.157-174  
 鈴木進一 2010a 「現代中国語指示詞の研究史——“这，那を中心に”——」『言語と文化論集』第16号 神奈川大学大学院 pp.123-148  
 鈴木進一 2010b 「大陸と台湾における指示詞の対照研究——“这・那”の距離認識の相違について——」『日本中国語学会第60回全国大会予稿集』日本中国語学会 pp.357-361

#### 資料1 アンケート用紙(天津)

请在括号(这／那)中选择一个你认为恰当的代词，划上圈。

年齢\_\_\_\_\_ 性别 男／女 你的母语是 汉语北方方言／其他方言(\_\_\_\_\_)

- (1)a “刚才说了吧，人若要在某件事上扯谎，就势必为此编造出一大堆相关的谎言。(这／那)就是说谎症。”  
 b “我刚刚也说过吧？人要是说了什么谎，就不得不配合那个说出一大堆谎吧。(这／那)叫做虚言症噢。”  
 (2)a “社会这东西，从根本上就是不公平的。(这／那)不能怪我，本来就是这样。”  
 b “世间本来就是不公平的。(这／那)不能怪我。一开始就是这样了。”  
 (3)a “她马上静静地睡了，或者说是装睡。但不管怎样，那张脸实在叫人怜爱，就像生来从未受伤的十三四岁的

孩子臉。見她（這／那）樣，我也放心地睡了。”

b “她立刻就沉沉地睡着了。或許是裝成睡着的也不一定。不過不管怎麼樣，那臉都非常可愛。看起來簡直像從出生之後一次也沒受過傷的十三，四歲女孩子的臉一樣。看她（這／那）樣之後我也就安心睡了。”

(4) a 若問自己現在所做何事，將來意欲何為，我都如墜霧中。大學課堂上，讀克洛岱爾，讀拉辛，讀愛森斯坦，但（這／那）些書幾乎對我沒有任何觸動。

b 自己現在到底在做著什麼，往後將要做什么，我完成不知道。大學的課程中我讀了克勞岱，讀了拉辛，讀了艾森斯坦，但是（這／那）些書幾乎對我沒發生什麼作用。

(5) a 在溫暖的被窩里想你是十分愜意的事。恍惚覺得你就在我的身邊，弓著身子睡得很熟很熟。倘若（這／那）是真的，那該多美呀！我想。

b 躺在溫暖的床上想著妳心情非常舒服。覺得好像妳就在我身旁，縮著身體沉沉地睡著似的。並想道如果（這／那）是真的話該有多美好啊。

謝謝你的合作

## 資料 2 アンケート用紙（台北）

請你在括號（這／那）中選擇一個你認為恰當的代詞，劃上圈。

年齡 \_\_\_\_\_ 性別 男／女 你的母語是 國語／台語／其他方言（\_\_\_\_\_）

(1) a “剛才說了吧，人若要在某件事上扯謊，就勢必為此編造出一大堆相關的謊言。（這／那）就是說謊症。”

b 我剛剛也說過吧？人要是說了什麼謊，就不得不配合那個說出一大堆謊吧。（這／那）叫做虛言症噢。

(2) a “社會這東西，從根本上就是不公平的。（這／那）不能怪我，本來就是這樣。”

b “世間本來就是不公平的。（這／那）不能怪我。一開始就是這樣了。”

(3) a “她馬上靜靜地睡了，或者說是裝睡。但不管怎樣，那張臉實在叫人憐愛，就像生來從未受傷的十三四歲的孩子臉。見她（這／那）樣，我也放心地睡了。”

b “她立刻就沉沉地睡著了。或許是裝成睡著的也不一定。不過不管怎麼樣，那臉都非常可愛。看起來簡直像從出生之後一次也沒受過傷的十三，四歲女孩子的臉一樣。看她（這／那）樣之後我也就安心睡了。”

(4) a 若問自己現在所做何事，將來意欲何為，我都如墜霧中。大學課堂上，讀克洛岱爾，讀拉辛，讀愛森斯坦，但（這／那）些書幾乎對我沒有任何觸動。

b 自己現在到底在做著什麼，往後將要做什么，我完成不知道。大學的課程中我讀了克勞岱，讀了拉辛，讀了艾森斯坦，但是（這／那）些書幾乎對我沒發生什麼作用。

(5) a 在溫暖的被窩裏想你是十分愜意的事。恍惚覺得你就在我的身邊，弓著身子睡得很熟很熟。倘若（這／那）是真的，那該多美呀！我想。

b 躺在溫暖的床上想著妳心情非常舒服。覺得好像妳就在我身旁，縮著身體沉沉地睡著似的。並想道如果（這／那）是真的話該有多美好啊。

謝謝你的合作